

## 講義ノート

## ワックスオクルージョン特論 —臨床技工プロ講座開講3年を通して—

明倫短期大学 臨床教授 榊原 功 二

### はじめに

平成17年度より臨床技工プロ講座のワックスオクルージョン特論を担当させていただいています。私の講座は2回にわけて行い第1回では咬合の基礎となる概念を、第2回では実践に活かす方法論に重点を置いています。

### 第1回講座

咀嚼器官の働きを考察し、理想的な咬合再構築の基本となるアングル・1級咬合における上下顎臼歯部の咬頭関係と前歯部の被蓋関係を、コーンテクニクの術式を使って再現し、同時に咬合の重要性を考えていきます。

歯科技工士にとって、まず歯冠形態の熟知は必要条件であり、上顎天然歯列において後方歯から前方歯へ咬合面展開角が順次的に急峻となっていることは、普段模型をよく観察していれば無意識のうちにも気付いているはずですが、機能的な形態を理解する上で重要なのは、下顎位維持のためのコンタクトの位置と運動時の側方ガイドの必要性であり、天然歯列に見られるこの原則は、咬合再構築の際に最も重要な要件となります。

さらに生体に調和した補綴装置の製作のための条件として、正確なプレパレーション、正確な印象、正確なバイト、正確な模型製作、正確な咬合器への模型付着、正確な咬合器調整のための情報、正確なワックスアップなどの作業が必要です。補綴装置を間接法で製作するにあたり、口腔内における下顎運動をある程度咬合器に再現する必要があるわけですが、下顎運動が咬合面形態に与える影響をどのように考えればよいでしょうか。咀嚼器官の役割がすべて解明されているとは未だ言えない現在、口腔内の運動を完全に再現できる咬合器も存在しません。そ

中でわれわれ歯科技工士は、生体に調和した咬合面形態を制作しなければなりません。そのための咬合再構築の目標は、パラファンクションや下顎運動を考慮しながら咬合面形態のコントロールが最もしやすい上下顎の咬合関係であるアングルのI級咬合とすることです。アングルI級咬合では、大臼歯上顎近心舌側咬頭が下顎中央窩に嵌合し、下顎遠心頬側咬頭が上顎斜走隆線の近心に嵌合します。この嵌合関係によって咬頭と隆線との接触(ABC接触)が獲得されることで下顎位は安定し、I級の咬合が維持されるのです。永久歯萌出過程で最も早く萌出する上下顎第1大臼歯は、このアングルI級咬合の関係をいち早く獲得し、咬合支持や下顎位の保持などの重要な役割を担っていると理解するべきです。

第1大臼歯を中心に上下顎臼歯部の咬頭関係をしっかりと構築したのち、前歯部の正常な被蓋関係を構築することで、咬合様式の基本としてのミューチュアリープロテクテッドオクルージョンを完成することができるのです。

### 第2回講座

単冠ケースを通じて、最も重要な上下顎第1大臼歯を題材に、第1回で学んだ咬合の概念を実践に活かすワックスアップを行います。

一般的な臨床の場面では、ドクターサイドからのどのようなデータを受け取り、それを基本としてどのような咬合を目標とするべきか、またどのような誘導形態を与えるべきか、ということに関して明確な指針がないのが現状でしょう。ここでは、その様な環境の中で技工士が咬合を考慮した仕事を行える事柄として、咬合平面の改善、犬歯誘導の与え方などを解説し、咬合構築において最も重要な鍵となる上下顎の第1大臼歯の形態について、また咬合様式の基本としてのミューチュアリープロテクテッドオ

クルージョン（犬歯誘導）と順次誘導咬合について、ワックスアップを通して説明します。

#### おわりに

歯科技工は職人的な部分が多い職業で、技術を会得するのは確かに難しいことであると思います。咬合論はさらに難しいと言われます。指導者の話を聞いて、耳で判断し、目で観察して、自分の脳で解釈し、神経を使って指の筋肉に伝えることで技工士の手は思う形態を目の前に再現することができるようになります。しかし、技工訓練時間の少ない筋肉では思うようにうまくは動いてはくれません。ここに、

どうしても筋肉の長い訓練時間が必要になるという問題が絡んでくると思います。これから歯科技工を学ぶ人たちにとって、筋肉の訓練時間を短縮することはできませんが、少しでも咬合論が身近なものとなるよう、どこにでもあるケースを通して理解してもらえるよう努力していきます。同じ言語、同じデータ、同じルールで学ぶことができたなら世界中の歯科関係の仲間とコミュニケーションできる、そんな未来が実現できたらと思います。

一芸は万芸に通じる、つづけること、やめないこと！